
悪魔とドア

佐武 辰之佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔とドア

【コード】

N0336I

【作者名】

佐武 辰之佑

【あらすじ】

ディケンズの「クリスマス・キャロル」のパクリ

扉をノックする者

悪魔とドア

気がつくと僕はそこに立っていた。空は今まで見たこともないほど澄みわたり、風はやさしく体を撫でてゆくように通り過ぎて行った。踏みしめる大地からは僕の体に流れ込んでくるような密着間を感じる事ができた。鳥は歌い、木々は楽しそうに踊っている。僕はドアを抜け、ついに辿り着いたのだ。 A place in the sun 「日のあたる場所に」

ある休日、僕はいつものように部屋でビデオを見ていた。とくにこれといってすることもなかったから、ただなんとなく見ているといった感じで。僕の部屋にぶら下がっているカーテンは光の幕をまとったように輝き、万物に惜しみなく降り注ぐ太陽の光を遮っていた。棚や部屋の隅にはしばらくきちんと掃除をしていないせいで薄く埃がたまり、灰皿の周りには収まりきらなかった細かい灰が星のように散りばめられていた。ありきたりの休日の過ごし方で、平和な一日だった。出かける気もしないし、金もない。こんな日は家でごろごろしているのが一番だ。ビデオを見終わって巻き戻しながら映画の内容を思い返していた。ストーリーは悪くなかった。ただ話しの展開が速すぎてうまく気持ちに乗せることができなかった。もう少しタメが欲しかったなと思った。ぼんやりそんなことを考えていると玄関のベルが鳴った。面倒くさいので出ないでおこうと思っただけ、ベルは執拗にすばやく何度も鳴り続けた。まるで中にいるのはわかっている、出るまではベルを鳴らし続けるぞ、といった感じだった。こんな失礼なことをする人は友人に限られているので、

しかたなく腰を上げ玄関まで行つてドアを開けた。そこには見たこともない男が一人立っていた。

「おう、邪魔するぜ」と言つたかと思うと男は勝手にずかずかの中に入つてきた。僕はさつと身をかわし、

「あの・・・」といいかけて急にその男は悪魔なのだとわかつた。

なぜだかは僕にもよくわからない。なぜだかわかつたのだ。男、いや悪魔はまるでこの家の住人であるかのごとくすたすたと階段を登り、僕の部屋へ入つていった。初めから決められていた行事を行うかのようにごく当たり前に。僕はなにが起こつたのかよくわからなくてその場に立ち尽くしていると、

「おい、ビール持つてこい」と悪魔が怒鳴つた。

なにがなんだか僕にはさつぱりわからなかつた。でも相手は悪魔だ。ここは逆らわないほうがいいかもしれない。どんなことをされるかわかつたもんじゃやない。

僕は冷蔵庫からビールを取り出し、グラスといつしよに部屋に運んだ。悪魔はテーブルの上座の位置に座り僕の煙草を勝手に吸つていた。

「まあ座れよ」悪魔はテーブルの向かい側を指差した。僕は持つてきたビールとグラスをテーブルに置き、悪魔の前に座つた。当然ながら恐怖で体が小刻みに震えているのがわかつた。悪魔の体格と年齢は僕と同じくらいで、高そうなブランドの服を着ていた。髪は短く、気難しそうな顔をし、眉の中心に力を入れて深い皺を作つていた。一見するとストレスを抱え込んでいる押し売りサラリーマンのように見えなくもない。他人が見ればおそらく悪魔だとは気づかないだろう。

「おい」悪魔は煙草を消し、持つてきたビールとグラスを見ながら言つた。「おまえ一杯目のビールのグラスぐらい冷やしとくのが筋つてもんじゃねえか」

「あ、すいません」僕はおどおどして答えた。

「まあそんなことはどうでもいいか。おまえも飲めよ」悪魔は僕の

グラスにビールを注いでくれたので、成り行き上僕は彼のグラスにビールを注いだ。「まあそんなに硬くなることはない。リラックスして話をしようじゃねえか。」

「はあ」僕は頼りない声を出した。悪魔は僕の7畳ぐらいの部屋をゆっくりと見回していた。部屋には何年も使ったペタンコになった絨毯が轆かれ、その中心に小さなテーブルが置いてある。ベッドが部屋の大部分を占めている。他にはAV機器が一式。と言ってもあまり立派なものではなく、もう時代遅れでなんとか動くといったようなものだ。壁にはジャズのポスターがなんの意味もなく一枚貼つてある。もういつ貼ったのかも思い出せないほど昔のもので今では壁の一部としての役割しかなかった。煙草のヤニで壁が薄黄色くなっているため、ポスターを剥がすとそこだけ時間に置いてきぼりをつくったようになるだろう。

「なぜ俺がここに来たか知りたいか？」悪魔は僕に聞いてきた。それが僕の一番知りたいことだった。僕はしっかりと頷いた。

「俺はな、ドアを取りに来たんだ」

「ドア？ですか」

「ああそうだ。それが俺のここに来た目的だ」

「え、なんでですか？」

「なんでもクソもあるかこの野郎。おまえがそれを望んだからじゃねえか」

「僕がですか？」びっくりして聞き返した。誰にもそんなこと頼んだ覚えはない。ドアの配達を頼んだ覚えもなかったし、もちろん悪魔を呼び寄せる儀式を行ったわけでもない。

「おまえ以外に誰がいるっていうんだ。だから俺がわざわざこうして会いに来たんじゃねえか」

「あの、失礼ですけど・・・あなたは悪魔・・・さん・・・ですよ」僕は話が全然見えてこなかったので思いきって聞いてみた。

「よくわかんねえけどおまえがそう言うなら俺は悪魔なんだろうな」彼は少し首を傾げながら答えた。

「で・・・」僕は考えをまとめようとちよつと間をおいて考えた。
「ドアを取りに来たんですね。ドアを取り替えたりするわけじゃなくて」

「そうだドアを取りに来たんだ」悪魔はビールを飲みながら答えた。実につまそうなビールの飲み方だった。CMに出れそうなくらいだ。悪魔であることを抜きにすれば。

僕はいまだに全然状況が飲み込めなかったのでとりあえず悪魔に向かつて笑いかけてみた。おそらくいぶんひきつった笑いになっていただろう。彼も「ははは」と笑い返してくれたが僕には彼がなにを言っているのか全くわからなかった。しばらくなんともいえない沈黙があたりを取り囲んだ。悪魔に対する恐怖心よりも今では混乱のほうが大きくなり、僕を支配していた。

「ドアってというのはこの家のドアのことですか？」話が前に進まないのので僕は思いつくまま聞いてみた。

「そうだな。この家のドアといえなくもないけど、俺の言っているのはあくまでも象徴的な意味でのドアのことだ」

「象徴？」

「そう象徴。おまえこの家の玄関からこの部屋までいくつドアがあるかわかるか？」数えようとすると「3枚だ」と悪魔は答えた。僕は家の中の構造を思い出し、玄関から入ってきてこの部屋に来るまでをイメージしてみた。玄関の入り口のドアが一枚・・・リビングから階段に上がるときに一枚・・・そしてこの部屋に入るときに一枚。確かに3枚だ。

「おまえそれがなにを意味してるかわかるか？」と、悪魔は聞いてきた。ただ僕にはさっぱりわからなかった。3枚のドアになんの意味があるのだろうか。3という数字が良くないのかもしれない。悪魔の住む世界では部屋に帰るまでに3枚のドアがあるというのは良くないのかもしれない。でもそんなこと僕には関係ないんじゃないかなと思った。もしかしたら悪魔は間違えてここへやってきたのかもしれない。僕は悪魔なんて呼んでないし、家のドアに異常がある

とは思えなかつたからだ。

「あの・・・場所お間違えじゃないでしょうかね」僕は自信のなさそうに言った。

「バカ、おまえ俺が場所を間違えるわけねえだろ」悪魔は軽くテールブルを叩き「俺はおまえに会いに来て、おまえのドアを取りに来たんだよ。」悪魔はそう言うといらいらしたように煙草をとって火をつけた。そして二、三口たてつづけに煙を吸い込んだ。

「僕も吸っていいですか？」

「おまえの煙草じゃねえか。勝手に吸えよ」悪魔はいくぶんやる気をなくしたように答えた。「だから言ってるだろ。俺の言ってるドアっていうのは象徴的なドアであって、ほんとにおまえ家のドアを外して持っていくわけじゃない」

僕はこんなわけのわからないことに巻き込まれるくらいならドアでもなんでも持って帰ってくれと思った。

「おまえがこの世界で一番心が休まる場所はどこだ？」誰でも知っている簡単な質問をするというふうな僕に聞いてきた。

「自分の部屋です」しばらく考えてから言った。

「そうだろう。ってことはだな、逆にいうとこの広い宇宙のなかでこの部屋でしか心が落ち着く場所がないということだ。・・・ここまでではわかるな」僕はまたしばらく考えてから頷いた。

「それが意味することはおまえがそれだけ心を閉じてるってことなんだよ」全然意味がわからなかつたけど首をかしげてごまかした。

「だから俺はおまえのドアを取りに来たんだ」

再び沈黙が訪れた。今度はどこまでも果てしなく続く沈黙だった。生まれてこのかた経験したこともないほど重く、長く、意味のない沈黙であるような気がした。悪魔は短くなった煙草を灰皿に突っ込んで新しい煙草を吸い始めた。僕ももう一本煙草を吸った。煙草を吸うことが唯一沈黙から逃れる手段みたいに思えた。悪魔は煙草を灰皿の角でトントンと叩き、それから火の付いている部分を擦り付けて形を整えた。彼は煙突から煙が上がるように自然にゆっくりと

煙を吐き出した。しばらくどちらも口を利かないでいると、絶えかねたように「なんか音楽でも聞くか」と悪魔は言った。僕が頷くと悪魔は立ち上がってCDラックのところに歩み寄り、CDを物色していた。やがて何枚かを取り出してステレオの近くに置き、ステレオの電源を入れた。カチ、という乾いた音をたて、WELCOMEという文字が浮かび上がってくる。悪魔がCDを入れると適度な音量でクラシックが部屋に響いた。悪魔がクラシックを聞くなんて意外な気がしたが、それ以外に彼の気に入る音楽がなかったただけなのかもしれない。まあ居心地の悪い沈黙を感じているよりはずっとましだ。

僕は悪魔の言ったことをなんとか理解しようと考えを整理してみた。悪魔はドアを取りに来たという。ドアというのは象徴であって、その象徴するものとは僕の心であるらしい。簡単に言えば僕の心は塞がっていて、悪魔は僕の心を開くために来たということになるのだろうか。

「要するにあなたは僕の心を開放するために来たということですか？」

「そう」悪魔は僕を指差しながら言った。

「まさにそれだよ。ようやくわかってきたみたいだな」

「そして僕がそれを求めていたからあなたはここへ来た」

「ああそうだ」悪魔は満足げに微笑みながら小さく拍手をした。

「いやあ、コミュニケーションができるってのは素晴らしいことだね。意思疎通。分かり合えた時ってのは運命的なひらめきであるようにさえ思えるね。いやあ素晴らしい。それでな、なぜ俺がここに来たかもわかっただろう。いやいや、言いたいことはよくわかる。確かに心を開くってことはそんな簡単なことじゃない。でもなそれにはちよつとしたコツみたいなもんがあるんだ。おまえひとりじゃそんな大変なことはできないから俺がちよつとアドバイスしに来たつてわけさ。いつもおまえは思っていただろう。『なんかいいことないかなー』なんてバカみたいな顔してさ。そんなことは常識的に

現実的に考えてもあるはずがない。奇跡なんてあったことあるか？
ん？ないだろう。そんなもんさ世の中なんて。ひどい所だぜまった
く。でもな、俺はおまえに呼ばれてここに来た。そう、おまえがそ
れを望んだからだよ」

「でもどうやって心を開けばいいんですか？」

「まあそんなに焦るなよ。急がば廻れっていうじゃねえか。じつく
りといこうじゃねえか。焦っても心は開かないぜ。焦れば焦るほど
心つてのは逃げていくんだ。するするつとね」悪魔はぬるぬるした
ウナギでも掴んでいるような仕草をした。「いやあ心つてのはおも
しろいもんだなあ。掴み所がない。毎日自分のチンポ握ってりや手
に入るつてもものとは訳が違う。まあとにかくちよつとずつ話をして
いこうじゃねえか。ゆっくりビールでも飲んでよ」悪魔はビールの
缶を左右に振った。もう飲みきってしまったらしくぺちャぺちャと
頼りない音がした。僕は「ちよつとビール取ってきます」と言つて
部屋を出て新しいビールを取りに行った。まだしばらくは話しが続
くように思えた。なんだかとんでもないことになったと思いつつ、
でも悪魔は僕に対して敵意は持っていないらしいので一先ず安心し
た。それに話しの内容からすると変なものを売りつけられたり、嫌
がらせをしに来たわけでもなさそうだ。それどころか捉えようによ
つては僕を救ってくれみたいでもある。でも彼は一体何者なんだ
ろうか。初めて見たとき直感的に僕は悪魔だと思った。しかしそう
聞いたときに彼ははどうでもいいといった感じの答えしかなかった。
確かにドアだかなんだかを取りに来たのが誰であるかと僕にはあま
り関係のないことかもしれない。でも本当に僕は自分の象徴的なド
アとやらを取つて欲しいと思つているのだろうか。よくわからなか
った。僕は新しい缶ビールを取り出して部屋に運んだ。僕が飲む分
ぐらいならいつも冷蔵庫に冷やしてある。ここ数年アルコール飲料
が一瞬でも家から消えさせることはなかった。こうゆうことに關し
ては僕はすごく気が廻るタイプなのだ。ウイスキーもワインも日本
酒も一通りは揃えておかないと落ち着かない。酒と煙草は欲しいと

きがないとすぐ困ってしまうからだ。部屋へ戻ると煙草の煙のせいで部屋の中が白く霞んでいるのがわかった。

「あの、ちょっと質問してもいいですか？」新しいビールをグラスに注ぎながら言った。酒のおかげもあるのだろうけど、互いの間に少し親密な雰囲気生まれつつあるような気がした。

「おう」

「僕には自分でもよくわからないんですけど、僕は本当に自分のその象徴的なドアを取りたいと思っっているんでしょうか。つまり・・・その・・・もつと心の自由を求めていると」

「よい質問だ」悪魔は僕を指差して言った。「自分は一体何を求めているのか。これは人類に課せられた永遠のテーマであり、人間が生きるうえで最も偉大な・・・まあいいかこんなことは。質問に答えるのだな、答えはもちろんイエスだ。だからわざわざこうして俺がやって来たんだ。はっきり言うのだな、おまえは自分がなにを求めているのかもわからないくらい心に壁を作っているんだ。それは外から入ってくる刺激に対して自分を守るためでもあるが、同時に自分自身をも見えなくさせているんだ」

「はあ、そうかもしれないですね」僕は少しビールを口に含んだ。「これから言うことは一つの落とし穴なんだが、その壁、いわゆるドアを取り払うと自分自身を見やすくなり、自分の求めていることもわかるようになる。しかし逆に外からの刺激もその分大きくなるつまりリスクが多くなるってわけだ。でもおまえはそれを望んでいる。今はわからないかもしれないけど、あとになればそのことに気づくはずだ」

「あとっていつのことですか？」

「おまえの家にはドアが3枚あるって言っただろう。今日は一枚目のドアを取っていく。残りの2枚を取ったときにそう思うだろう」なんでもなさそうに彼は答えた。今日一枚ドアを持って行くってことはあと二回も彼はここへ来るつもりなんだろうか。冗談じゃない。僕はゆっくり休みたいんだ。日々の暮らして疲れているのに悪魔と

ビールを飲んでる場合じゃない。僕は自分の時間を何かに取られるのはすごく嫌なのだ。

「あの・・・あなたはあと二回もここへ来るということですか？」
こんなことを聞いては失礼かもしれないけど、酒のせいで少し大胆になつてきていた。悪魔は少し身をのりだし、人指し指をぴんと伸ばして僕に近づけた。

「いいかよく聞けよ。何度も言うようだが俺はおまえが求めているからここにいるんだ。俺はそれをわかっているが、おまえはまだわかっていない」悪魔は僕の目をしっかりと見つめ、何かを言い聞かせるような力強い口調で言った。「たしかにこの複雑で混沌とした世の中じゃ、自分のことですらわかりにくい。買い物に行っても本当にそれが買いたくて買っているのか、テレビを見ていても見たくて見ているのか、友達と遊んでいても楽しくて遊んでいるのか、ただの退屈しのぎなのか。自分が本当に望んでやっていることなのか、わかってないんだ。でもそんな中で、このままでいいのかって悩んだり、無意味な日々を過ごしているようで落ち込んだりするだろう。そしてやみくもに辺りのものを掴んでみてはこれじゃないと放り投げ、それを繰り返し返して振り返ってみるとただ下らないものが転がっているだけだ。なにをしても手応えというものが感じられない」それを聞いて僕は半ば驚愕した。

「どうしてそんなに僕のことを知っているんですか？」僕はだんだんと悪魔の話しに引き込まれている自分に気づかないわけにはいかなかった。

「ふん、それはいずれわかる 때가来るだろう。でも言つとくがな、俺とおまえの違いはたった一つしかない。俺は知識や経験も人並みだし、とくにこれといって特殊な能力があるわけでもない。ただ俺はおまえより自分の心というものを知っている。それだけさ」

「でもこうしてしゃべっているとあなたは表現も巧みで、話し上手のように思えますけど。僕なんかとは全然違つてもっと有能でパワフルでもある」僕がこう言つと悪魔は遠くを見るような目つきをし

てしばらく何かを考え込んでいるようだった。僕が目の前にいることを忘れてしまったみたいにしてしばらくじっと動かず、部屋の一部に溶け込もうとしているように思えた。あるいは流れてくる音楽に耳を済ませていたのかもしれない。

「おまえがそう思うのも無理はないのかもしれないな。まあ、ちょっと難しい話しになるかもしれないが、俺はおまえと比べて自分の心に対してより自然で素直なだけなんだ。心の流れに逆らわず、だましたり押し殺したり、流れをねじ曲げようとはしない。そうすると自分の熱ってというか生命力っていうかだな、そういうものをストレートに放出することができるんだ」

「うーん、例えばどうゆう具合にですか」

「おまえなんて優れたアーティスト、いわゆる芸術ってものは大衆に求められ、そして大衆を魅了し、満足させるかわかるか？」僕は自分の役立たずな脳みそをフル回転して考えてみた。そんなこと考えてみたこともなかった。そんなことに理由があるのかすら僕にはわからなかった。部屋にはシヨパンの幻想即興曲が流れていた。地平線の見える広大な台地の中で嵐のような強風に吹き付けられているような荒々しさが伝わってきた。それに合わせるかのように煙草の煙がどこへ辿り着くこともなく部屋中をもどかしそうに駆け巡っていた。

「いや、わかりませんね。まったく検討もつかない」僕は正直に答えた。

「それはな。そこにパワーがあるからだ。いわゆる熱。生命力ってやつがな。そんなもんはみんなが持っているもんだろ。この世に存在するすべてのものが。でも優れたものとそうじゃないものの違いってのはだな、優れたものはより洗練され研ぎ澄まされてシンプルなんだよ。わかりやすい、伝わりやすいんだ。だからその熱、生命力ってもんもダイレクトにそこに反映しているんだ」

「うーん、それだけじゃよくわかんないですね。」僕はこめかみのあたりに手をあてて、なんとか理解しようと試みた。「つまりシン

ブルであればあるほどいいってことなんですか「僕の頭は複雑にこんがらがっていた。」

「俺もできるだけわかりやすく説明してやりたいんだが、まあ、わからなくてもいいから聞いてくれ」悪魔は少し困ったような表情をしながら頭を掻いた。「だんだん話しがややこしくなってきたけど、ドアを取る上ではこれは重要なことであり、必要なことなんだ。まあとりあえずビールでも飲めよ」悪魔は僕のグラスにビールを注いでくれた。「そう固くならずリラックスして聞いてくれ。別にわからなくてもおまえを責めるわけじゃないし、おまえに責任があるわけでもない」悪魔はグラスに半分ほど残ったビールを飲み干したので僕は彼のグラスにビールを注ぎ、話しの続きを待った。

「いいか。優れたアーチストっていうのはより深く自分の心を求めているんだ。自分にとって何が必要で、なにが必要じゃないのかを区別して、いらぬものはどんどん捨てていく。心が求めるものを追求していくんだ。逆にいうと求めるってことは足りない、いわゆる欠落だな、それを埋めようとする。そしてその欠落がどういったものなのかだんだんとわかってくる。自分の心がどういったものなのか。どうすれば欠落を埋めることができるのか。その手段や方法も巧みになってくる。求めるものがわかってくるんだ。だから純粹にその欠落を埋めることだけに没頭する。他のことに気持ちを捕らわれることも少なくなってくる。気持ちが集中するようになる。そしてそのことが煮詰められて、表現したいことがはっきりしてくる。いわゆる純化されシンプルになっていくんだ。ようするに心が求めるものをわかっていけばわかっているほどストレートに感情を表現することができるってことだ。直接的な表現であればあるほど伝えやすいし、伝わりやすい。熱や生命力も同じことだ・・・だいたいわかったか？」

僕は頭を抱え込んだ。はつきり言ってよくわからない。今まで誰もそんなこと教えてくれなかったし、こんなこと言う人もいなかった。答えのない命題を突きつけられたような気がした。僕の頭はこんが

らがり、より複雑になったように思えた。僕は優れたアーティストではないし、僕に関係のないことを言われても何のことだか想像もつかない。

「別の言い方をするとだな」悪魔は悩んでいる僕を見て話し始めた。「今のおまえのように自分が何を求めているのかもよくわからないってことはまだおまえの頭の中はそれだけごちゃごちゃしてるっていうことだ。整理されてなくて必要じゃないものをいっぱい抱え込んでいるんだ。いろんな情報がありすぎて、どれが自分で選んで手に入れたものなのか見分けもつかなくなってる。いらぬものは捨てなくてはいけないのもうどれがいるものでどれがいらぬものなのかもわからなくなっているんだ。何かを捨てるということは自分の中の何かを否定するということだからな、そんなに簡単なことじゃないのかもしれない。でもいっぱいものを溜め込みすぎて余計にごちゃごちゃしてくる。いわゆる悪循環ってやつだな。そんな自分が何を求めているのかわからん奴が他人に何かを伝えようとしたって、自分でもわからんことを他人がわかるはずないだろ」

自分に理解できてないことを他人に伝えるのは不可能だ。確かにそうかもしれない。でもどの程度で「わかる」ようになり、どのくらいで「わからない」ものなのだろう。

「ようするにもっと心を開いて、自分を知ればいいってことですか？」

「まあそうだな」悪魔は頷いた。

「でもどうやって自分を探っていけばいいのかもわからないんですけど」

「おまえな」。俺の話しちゃんと聞いてんのか？せつかく俺がこうしてわざわざ出向いて話してんのに。」

「すいません。よくわからなくて」

「まあいいけど、そんなことはたいして問題じゃない。にしてもおまえわかんないばかりだな」僕は何も返す言葉がなかった。

「まあまあ気を悪くしたんなら謝るよ。何も俺だっておまえを困ら

せにきたわけじゃないからな」悪魔は煙草に火をつけて煙を吸い込んだ。そして僕にも煙草を渡すような仕草をした。僕は軽く手を拳げて断った。煙草の吸いすぎで喉が気持ち悪かったからだ。

「なあ、おまえ『スモーク』って映画見たことあるか？」突然映画の話しになったので、少し考えなくてはいけなかったが、その映画は見たことがあった。随分前のことなので話しの内容は忘れてしまったけど、けっこうおもしろかったような気がする。

「あの映画の冒頭でこんなシーンがある。ある作家が仲間と話しをしているんだ。その作家は中世に起こった出来事を例にして煙草の煙の重さを量るっていう話をする。すると仲間の中のひとりがこう言うんだ。『そんなことできつこねえ、魂の重さを量るみてえなものだ』ってな。そうするとその作家はこう説明する。まず火の付いていない煙草の重さを秤に載せて量るんだ」悪魔は実際に手に持った煙草を45度ぐらいに傾げて僕に見せた。「そして火を付けて煙草を吸い、灰は全部秤の中に入れる。吸い終わった煙草をフィルタ―も一緒に秤に載せ、その重さを最初のものから差し引くんだ。それが誤差が魂の重さだったな。そんな話だ。どうだ・・・俺たちの人生のような話じゃねえか」悪魔は得意そうにそう言ったけど僕は曖昧に合槌を打っただけだった。

「じゃあな、とりあえずおまえの書いている日記と絵を見せてくれ」そう言っただけで悪魔は手を差し出した。僕はすぐくびくびした。僕はできるだけ欠かさず日記をつけるようにしていた。でも最近はこのように変わらばえのない生活をしていたためそんなに書くこともなくさぼりがちになっていた。毎日会社と家の往復だけなのでこれと言っただけで書くネタもなくなってくる。そしてたまに油絵を描いた。そんなに本格的に描いているわけじゃないけど、落ち着かないときや落ち込んだときに描くことが多かった。昔から続けているわけではなく、誰かに習ったわけでもないけど、テキストを買ってきて少し勉強して気の向くままに描いていた。ほとんどは風景画、たまに人物も描いた。誰に見せる予定もなかったし、また見せようという

気にもならなかったので自分の思ったままに描いていた。だから誰も僕がひとりこそそと絵を描いているなんて知らないはずなのだ。「なんでそのことを知っているんですか？」

「俺はおまえのことならなんでも知っている。とりあえず見せてみる」

「いやーそれはちょっと」僕は苦笑いをした。

「なんでだ」

「なんでだ、って言われてもやっぱり恥ずかしいじゃないですか」

「はー」悪魔は小さくため息をついた。「おまえまだそんなこと言ってるのか。それはな、それがおまえの本心だからだ。日記とか絵を書くときはおまえでも少しは心を開くだろ。かつこわるい自分や、人に見られたくないどろどろした感情をそこに書くはずだ。それを見せるのが恥ずかしいってことは本当の自分を隠してそれだけ心を自分で塞いでいるってことだろ」

「本当の自分ですか？」

「そうだ本当の自分。それはもちろんひとつしかない。2つも3つもあったら本当の自分じゃないからな。おまえいつもイメージの自分を作り上げてそれと今の自分を比較して、ああでもない、こうでもないって悩んでいるよな。もつとこうになりたい、こうゆう自分でありたいなんて具合に」彼は顎の先端を軽く僕の方に向けた。

「ええ、でも・・・みんなそんなふうに・・・自分を作り上げているんじゃない」

「でももクソもねえよおまえ、そんなもんが本当の自分だと思うか」そう言われて僕は少しムツとした。今までの僕のライフスタイルをそんなふうには否定しなくてもいいじゃないか。人にはそれぞれのやり方というものがあるのだ。僕は少し悪魔を睨んでみた。そういう空気が向こうにも伝わったみたいだった。気が付くとCDは終わりと互いの間に気まずい空気が感じられた。悪魔は黙って立ち上がるとクラシックのCDを取り出し、新しいCDに入れ替えた。今度はゆったりしたジャズバラードに変わった。チェット・ベイカーのシン

グス。僕の好きなアルバムだった。音楽がかわったせいで気分も少し落ち着き、僕は煙草を手を取った。

「まあ言い方が悪かったな。今のは悪かった。俺もけっこう酔っ払ってきたみたいだからな」悪魔も煙草を取り、感謝の気持ちを示すためか煙草を上を持ち上げた。いくらアルコールが入っているからといっても、ほんとによく煙草を吸う人だなと思った。「まあ気をとりなおして飲もうや」悪魔はビールを注ごうとしたが、どの缶ビールも空っぽだった。僕はまた新しいビールを取りに行った。ついでにトイレにも行きおしっこをした。冷蔵庫の残りのビールを全部持って部屋に戻った。僕の4日分のビールがわずか二時間も経たないうちに無くなるうとしている。それに何本煙草を吸っただろう。ここで悪魔を追い返すこともできたかもしれないけど、これだけ話しをしてくれたのでなんだか悪いような気もした。僕のほうもずいぶんと酔ってきたらしく足元も危うい感じがした。

「とにかくな」部屋のドアをくぐるとすぐに悪魔はそう言った。

「物事つてのは理屈じゃねえんだ。人が心を通じ合わせるってことにおいてはどんなにりっぱな理論であろうとも、それが正しかろうとも、正しくなかるうともそんなことはあまり重要じゃない。やっぱりさつき言ったように熱なんだよ。お互いの心の熱に触れ合ってそれを認めることができたとき、感じあうことができたとき、初めて心を動かすことができるんだ。ごちゃごちゃ、ネチネチ言われるよりは、一発ぶん殴ってやったり、抱きしめたりしたほうがわかりやすいってことが多いだろ」

「そうですね」確かにそれは納得できた。あまりに部屋が煙で濛々としていたので僕は少しだけ窓を開け、空気を入れ替えようとした。白っぽく霞んだ空気がゆっくりと窓に引き込まれていった。

「話しを戻すとだな」悪魔はビールを飲んで一呼吸入れた。「本当の自分てのはイメージで作り上げるもんじゃない。イメージで作れる自分は無限に存在するからな。さつきも言ったように本当の自分てのはひとつしかないんだ。ただそこにあるもんなんだよ」そう

言って僕の胸のあたりを指差した。「そしてそれはおまえが言ったように、恥ずかしいものであり、人に見られたくないものであり、汚くてどろどろしたもんだ。本当の自分ってのはみっともなくてかつこ悪いもんだ。そこでだ」悪魔は僕の目をじっと見つめた。僕は自分が透かされて見られているような気がするほど、真っ直ぐで迷いの無い視線だった。

「自分を知り、心を開くということとはそれを受け入れるってことなんだ」悪魔はいつまでも僕の顔を眺めていた。その視線はだんだんとやさしいものに変わって来た様で、僕を見守るかのようだった。

「だいたいわかります」僕は言った。

「まあだいたいいいよ、今日のところは。それに初めてわかるって言ったもんな」そう言っただけに微笑みかけた。今日見た中で一番親しみを感じた微笑だった。まるで自然にこぼれてきたといった感じの微笑みだった。その笑顔を見ていると僕も思わずにつこりと微笑んでいる自分に気がついた。こんなふうに親しみのある微笑を交わしたのは随分久しぶりのことのように思えた。会社ではお互いのプライバシーを守るために遠慮がちな付き合いしかしていないし、気心の知れた学生の頃の友達は遠く離れたり、もう結婚して落ち着いていたりして今ではめったに連絡もしない状態が続いていた。あの年齢を通り過ぎてしまおうと新しい友達というのもできにくくなる作るのも面倒にすら感じられることもある。そうやって何かを守ってゆくようになる。何を守っているのかもはっきりしないし、その守っているものに価値があるのかもわからないけど。

「なあ、ブラザー」ブラザー？僕は少し眉をひそめた。「大切なのは今だ。今しか大切なことはないと言ってもいい。確かに未来や過去のことを考えてそこから何かを見つけて出すことはできるだろう。未来を妄想し楽しむことはできる、過去を振り返って学んだり、懐かしんだりすることはできる。でもな、未来は誰にもわからないことであり、過去は終わったことなんだ。大切なのは自分を感じることに。そうだろ。自分を実感できるのは今しかない。自分の心を感じ、

その熱を燃やすことができるのは今だけだ。今の自分が感じれない奴には中途半端な未来と過去しか作ることはできないんだ。それを忘れるなよ」悪魔がそう言い終わるとどちらも口を開くことはなく、ただ煙草の燃え上がる煙と流れる音楽が時間の経過を告げていた。確かにそれは沈黙であったが、先ほどのように意味もなく静まり返っているのではなかった。互いの存在を認識し、それを確かめ合うような、なくてはならない沈黙のように思えた。悪魔が煙草を一本吸い終え、それをもみ消してしまうともう何もしゃべることはなくなった、というような気がした。

「最後にな」向こうもそう思っていたのか話しは終わりにかけていることがわかった。ビールも飲みきってしまい、煙草も無くなりかけていた。「言葉ってのは不思議なもので、それ自体は全く意味を持たないんだ。ただひとつの概念としてどこか体の中をふわふわと漂っているんだ。でもある時になにかの言葉と言葉がぶつかったり、経験なんかと交じり合うことによってその概念が始めて意味を持つようになる。何かのショックが加わって弾けるときに溶解して体に溶け込むんだ。そしてようやく言葉が意味をもつようになる。だから溶け込むまでは待つしかない。ということであんなに帰るぜ」そう言ってニヤツと笑ったかと思うと立ち上がって振り返りもせず、に部屋を出て行った。階段を下りるトントンという音が聞こえ、しばらくすると玄関のドアが閉まるボタンという音がした。

来たときと同じように唐突に立ち去っていった。風のように現れ、風のように去っていった。波のようにゆっくり起き上がって倒れたと思うと後には何ひとつ残っていないという感じがした。煙草の煙で濛々とし、アルコールの匂いで満ちた部屋で自分に起こったことをまとめようとした。考えれば考えるほど不思議な出来事だった。一体悪魔は、彼は誰だったのだろうか。ちょっと前まで彼はここにいて僕と話しをしていたのだ。ドアを取りに来たと言っているんな話を聞いた。彼が一枚目のドアを取っていったのかどうかよくわか

らなかつたけど、酒を飲んで気分が高揚したせいか、僕の中にじんわりとした熱を感じる事ができた。僕は煙草を吸いながら話しの内容を思い返してみた。悪魔は僕の心が求めているものを僕に教えに来たのだ。どう考えてもおかしな話しだった。そんなことをして一体彼に何の得があるのだろうか。どこかに落とし穴があるのかもしれない。最後にはひどい目にあうのかもれない。そう思ったけど僕は今まで感じたことがないほどの不思議な開放感に包まれていた。何が起こっても悪魔の言ったことを信じ、受け入れようとする心がどこかに芽生え始めていた。今わかるのは悪魔が悪い人ではないということだった。少し態度や言葉づかいが荒々しく感じられるところはあつたが、いろいろなことを真剣に僕に伝えようとし、彼の話しの中には彼の言う心の熱というものを感じる事ができた。それは僕の心に響き、ずっと前に眠ってしまった感情を揺り動かし、自発的に目覚めさせるような温かさを持ったものであつた。その熱に身を任せれば僕の知らない美しい世界へと導いてくれるような絶対的な母性愛ともいえる安心感がそこにはあつた。なぜこんなに悪魔を信頼し、心を開いて話しをしたのか僕自身にもよくわからなかつた。彼が言うように僕がそれを望んでいたのかもしれない。アルコールでぼんやりした意識の中でそんなことを考えていると急に眠気が襲つてきた。悪魔との話しをカプセルで包んで意識の奥のほうに保存するような眠りだった。遠ざかってゆく意識の中で悪魔の言つたことを思い出した。「言葉が溶け込むまで待つ」彼が最後に言つたことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0336i/>

悪魔とドア

2010年10月12日20時17分発行